２０１１／０６／０５　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：我らの偉大な神
聖書箇所：ローマ人への手紙　１１章３３－３６節

　１８８６年、牧師カール・ボーバーグはスェーデンの南東海岸にある美しい田舎町を訪れていました。その時、彼は突然、雷雨、嵐に襲われました。その雷光は彼に神に対する畏敬の念を抱かせました。嵐が過ぎ去った後、雲の切れ間から差し込む輝く日の光、周りから聞こえてくる美しい小鳥のさえずり、この時、彼は主の前にひざまづき、心から主を礼拝したとあります。その時に彼はペンを取ってある賛美を書き記しました。その詩が英語に翻訳され、後に、日本語に翻訳されました。日本語ではこのように歌っています。「輝く日を仰ぐとき　月星眺むるとき、雷鳴り渡るとき　真の御神を思う、わが霊いざ称えよ、大いなる御神を　わが霊いざ称えよ、大いなる御神を、」と。この詩を英語に翻訳したのは、その当時、ウクライナで働いていたイギリス人宣教師のスチュワート・ハインという人物です。この詩を訳した後、彼にある人が「この賛美歌の１番大切なものは何ですか？」と質問した時に、彼はこのように答えています。「我々が天の家にたどり着いた時、我々は主なる神の偉大さを理解することができるだろう。そして、我々は謙虚に、崇敬の念をもって御前にひれ伏し、主よ、私の神よ、あなたは何と偉大なお方なのでしょうと申し上げる。」と。
　パウロ自身もこのように言いました。ペテロ自身もこう言いました。それは彼らが、この主なる神がどのようなお方で、何を為さり、何を為しておられるかを知っていたからです。神のすばらしさを知る時に、そして、神のすばらしいみわざに目を留める時に、そして、神のすばらしい約束に私たちが心を向ける時に、私たちの内側から湧き上がって来るものがあります。神への賛美です。神への礼拝です。このようなことばを言わなければいけないのではなくて、このようなことばが彼らの内側から出て来るのです。「神さま、あなたは何と偉大なお方なのでしょう。」と。
　パウロはこの偉大な神を知っていました。そのことを彼はこのローマ人への手紙１章から私たちに教えてくれました。そして、９章からこの１１章まで、イスラエルに対するすばらしい神の計画をパウロは教えてくれました。パウロの主への感動が、そして、この神への畏敬の念が、今朝見るこの箇所に集約されています。ごいっしょに１１章の最後の部分である３３節から、パウロの神への賛美、神への称賛を見て行きましょう。

☆私たちの偉大な神
Ａ．偉大な神　　３３節
　まず最初に、パウロは３３節に「主の偉大さ」について記しています。**「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」**、パウロはここで**「神の知恵と知識との富」**について語っています。そして、それは**「何と底知れず深いことでしょう。」**と言っています。**「底知れず深い」**とは「無尽蔵の、余りにも深くて私たちには理解できない」という意味です。
１．神の豊かさ　：　主が富んでおられる二つのこと　　３３ａ節
　パウロは神が富んでおられること、豊かなことを特に二つ上げています。もちろん、この二つのことにおいてだけ神が富んでおられるのではありません。聖書の中を見ると、神は「慈愛」においても「忍耐」においても、「寛容」においても豊かであると教えています。「栄光」において、また、「恵み」においても豊かなお方であると聖書は教えます。
ローマ２：４「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」
ローマ９：２３「それも、神が栄光のためにあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためになのです。」
エペソ１：７「私たちは、この御子のうちにあって、御子の血による贖い、すなわち罪の赦しを受けているのです。これは神の豊かな恵みによることです。」
エペソ２：７「それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜わる慈愛によって明らかにお示しになるためでした」
　しかし、敢えてパウロはその中で特に、この「知恵」と「知識」をここで取り上げています。パウロは言います。「私の神、私たちの神はこの知恵と知識において豊かなお方である。」と。パウロが言いたかったことは何でしょう？

１）「知恵」　：　すべてのことにおいて最善をなされる

まず、この「知恵」ということばです。もちろん、神は何が最善なのかを知っておられ、そして、それだけでなく、神はすべてのことにおいて知恵があるゆえに、最善をなさるお方です。私たちは知恵がないゆえに、自分が最善だと思うことをします。でも、後になってそれが最善でなかったことに気付くことが何度もあります。神は知恵のあるお方で、何が最善であるかを知っておられる。だから、神の為さることはすべて最善であるというのです。

<u>主の知恵は</u>：

（１）創造に示された＝神がどれ程知恵のあるお方であるかということは、私たちが神がお造りになった創造物を見る時にそのことが分かります。人間はやっとそのことを発見したに過ぎません。ＤＮＡを発見しました。「偶然に出来た」と言います。しかし、私たちがそれを見る時に、それをデザインなさった方、それをお造りになった神の知恵の偉大を知るのです。このようなものを造られた神の知恵、それは何とすごいのだろうと。被造物は私たちに神の知恵を教えてくれます。

でも、パウロがここで特に強調しているのはその知恵ではなくて、救いについての知恵です。

（２）十字架で示された＝十字架で示されたその知恵です。なぜなら、パウロは救いについて話して来たからです。異邦人の救いについて教え、イスラエルの救いについて教え、そして、パウロはその背後にすばらしい神の知恵があることを教えたからです。私たちはこれまで「救世主を拒む」というイスラエルの選択を見て来ました。待望の救世主が来たのに、イスラエルはその救世主を拒んだのです。皆さんはどう思いますか？この誤った選択は神の計画を台無しにしたのでしょうか？神はその様な選択をしたイスラエルを見て「なぜ、そのような選択をするのか？わたしが立てたその後の計画がすべて台無しになるではないか！」と思われたでしょうか？答えは明らかに「ノー」です。神はイスラエルが救い主を拒むことによって、異邦人である私たちにこのすばらしい救いの恵みを与えようとされたのです。神はそのような計画を持っておられました。

では、この救い主を拒んだイスラエルにもうあわれみはないのか？彼らの罪が赦されることはないのでしょうか？神は明確に教えてくれます。神は彼らのためにすばらしい計画を持っておられる。異邦人の時が完成することによってイスラエルが救われるということです。このように見たときに、神は私たち人間の誤った選択によって、その都度、計画を変更されるようなお方ではありません。人間の想定外の行動によって混同されるお方ではないのです。人間の誤った選択のすべてを知った上で、神は計画を立てておられるのです。しかも、それは被造物を創造される前、永遠の昔に立てておられたのです。私たちに想像出来ない、考えられない、理解できないことです。

また、信仰による救い、教えを主は私たちに教えてくれました。異邦人であろうとイスラエル人であろうと、すべての罪人は福音を信じる信仰によって救われると、いったいだれがこのようなことを思い付きますか？私たち罪人の救いのためにご自分のひとり子イエス･キリストをこの地上に人として遣わし、この罪のないお方が私たちの身代わりとして十字架で私たちに変わってさばきを受けてくださるという、だれがこのようなことを思い付きますか？このイエス・キリストの十字架の死、この身代わりの死は、神があるとき思い付かれたのではありません。永遠の昔に決めておられたことです。

神の知恵、私たちには理解できないことです。この救いにおける神の知恵は私たちが言う知恵とは異なります。Ｉコリント１：１８－２１にパウロはこのように言っています。**「十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。:19 それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」:20 知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。:21 事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」**、この世にあって知恵があると言われている人々が、その知恵ゆえに救われないのはなぜでしょう？もし、その知恵ゆえに救われたとすれば、彼らは自分の知恵を誇るからです。「私の知恵が私を救った！」と言うからです。救いをいただく者たちは、神の前に謙虚に救いを求めて出て行く者たちです。その道がどんなに狭くても、それが真理であるゆえにその救いを求めて行こうとする、そのような人たちです。そして、この人たちは、救いをいただいた時に、自分の行ないを決して誉めません。救いを与えてくださった神だけを誉めます。

神の知恵、この主だけが称賛をお受けになるにふさわしいお方、主だけが栄光をお受けになるにふさわしいお方、そのようにパウロは私たちに教えてくれます。人間がこの世の知恵をどれ程得たとしても、その知恵によってこの救いを得ることはない。神のあわれみによって私たちはこの救いに与るのです。信仰者の皆さん、あなたが偉かったから神が救ったのではありません。あなたが立派だから救ったので

もありません。神が一方的にあなたを愛して、あわれみを示してくださったからです。すべては神の知恵、神のあわれみです。私たちはこのように救いを見るときに、そこに存在する神の知恵の、パウロのことばを借りるなら**「底知れず深い」**、私たちには理解できない神の知恵を見ることになります。「私の神はこの知恵において私たちの理解を超えておられる方だ。」とパウロは言います。

２）「知識」　：　神は永遠のすべてのことを知っておられる

「知識」ということばが後に続きます。パウロはここで「知識の豊かさ」についても教えます。「知識」、パウロはここで、神が永遠におけるすべてのことを知っておられるということを言うのです。

ａ）「時」を知っておられた＝もう私たちが見て来たように、パウロは異邦人の完成の時を神がご存じであることを知っていました（２５－２６節）。イスラエルの頑なさは永遠でなく一時的だと知っていました。それが変えられる時がやって来ることを知っていました。しかも、その時がいつなのかを知っておられます。いつ、この世の終わりが来るのか、そのことも神はご存じです。なぜなら、神はこれから起こることをすべてご存じだからです。その知識を持っておられるのです。

ｂ）「約束を守る」＝２６－２９節

ｃ）「あわれみにあふれたお方」＝３０－３２節

このようなお方だから、私たちは今、そして、私たちの将来のすべてを委ねることが出来るのです。私たちがいろいろな不安をもつのは先が見えないからです。明日がどうなってしまうかという不安を抱えている人は、心が騒いで仕方ないのです。しかし感謝なことに、私たちの神は明日起こることも、明後日起こることも、来年起こることも、そして、永遠に至るまですべてのことをご存じなのです。そのような神にすべてを委ねて歩むことが出来るということは大きな祝福だと思いませんか？もちろん、あなたが一人でそれをすべて背負って一人で悩むこともできます。苦しむこともできます。しかし、そこには何の解決もないし、何の喜びもありません。感謝なことに、明日のことも、将来のすべてのことを知っておられる神が「わたしに任せよ」と言ってくださっているのです。だから、私たちはこの神にすべてを任せるのです。なぜなら、この方はすべてのことをご存じだからです。このようなすばらしい祝福を私たちはいただいているのです。

ｄ）個人的経験、個人的な関与、関わりからのもの＝同時に、ここで使われている「知識」ということばは、実は、個人的経験とか、個人的な関与、関わりからのものです。つまり、神は本当のあなたを知っておられるということです。神はあなたと関わって来た、それを通してあなたのことを知っていると言うのです。もちろん、神は全知ですから、そのようなことがなくてもすべてをご存じです。でも、敢えてそのことを私たちに教えているのです。それ程、神はあなたに関心があるということです。あなたの愚かさを知っているのです。このみことばは私たちを励ましてくれます。詩篇１０３：１４に**「主は、私たちの成り立ちを知り、私たちがちりにすぎないことを心に留めておられる。」**とあります。　私たちがどれ程愚かであるか、どんなに弱い者かを神はちゃんとご存じだと言うのです。本当のあなたのことを個人的に知っておられる神だから、あなたの必要もご存じなのです。あなたの霊的な必要もご存じです。なぜなら、この方はあなたの弱さを知っているから。あなたの物質的な必要もご存じです。何があなたに必要なのか、何時それを与えるべきなのか…。このような神に私たちはすべてを託して生きることが出来るのです。

パウロは言います。「神のことを思うほどに、この方について考えるほどに、その知恵においても、知識においても、私たちはその豊かさのすべてを理解することは出来ない。それ程、神は私たちの思いをはるかに超えておられる方だ。」と。３３節の後半を見ると**「そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」**と、「神のさばき」と「神の道」がその後に続いて出て来ます。どちらも神が為さる行ないに関することです。

２．神のさばき　：　神の決断　　３３ｂ節

「そのさばきは、何と知り尽くしがたく、」とあります。この「神のさばき」とは「神の決断」のことです。なぜ、神がこのようなことを赦されたのか、このようなことを為さるのか、私たちには分からないことがあります。パウロは言います。「私の神が為さって来られた決断は私たちには理解できない。でも、分かっていることは、神が為さったことはすべて完璧である。」と。シュレイナーという神学者はこのように言います。「この『神のさばき』ということばは、神のさばきに関する決定に限定するのではなく、世界において神が下されたすべての決断がそこに含まれる。」と。ですから、今私たちが見て来たように、神が歴史上これまでいろいろなことを為さって来られたが、そのことは神がお決めになったことです。そのすべてが含まれると言うのです。そして、そのすべてのことは私たちにとって**「知り尽くしがたく、」**と書かれています。これは「測り知ることが出来ない、不可解だ」と言うのです。怪しいと言っているのではありません。余りにも、複雑すぎて神秘的すぎて、私たちには理解が出来ないと

言うのです。私たちにはわけが分からないと言うのです。それ程、神は私たちとは懸け離れた存在なのです。神の決定において私たちはすべてを理解することは出来ないと言うのです。

３．神の道　：　神の行為　　３３ｂ節

また、「神の道」とは「神の行為」のことです。同じようにシュレイナーは「この世界における神の行為のことであり、救いとさばきの両方の行ないを含む。」と言います。神が為さって来られたことです。**「その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」**とあります。**「測り知りがたい」**とは非常におもしろいことばを使っています。「その後をたどれない、見つけられない、調べても分からない」という意味をもつことばです。後をついて行こうとしてもその足跡が見つからない、そういうことです。詩篇の中にこのように記されています。詩篇７７：１９**「あなたの道は海の中にあり、あなたの小道は大水の中にありました。それで、あなたの足跡を見た者はありません。」**、つまり、私たちが歴史を振り返って、また、私たちの周りを見て様々な出来事を知ることは出来ます。このようなことが起こった、このようなことを神はお赦しになったと。しかし、そこにある神の計画は分からないということです。

ダビデはそのことを知っていました。ペテロはそのことを知っていました。そして、パウロもそのことを知っていました。彼らは知っていたのです。私たちにはこの神が為さっているすべてのことを理解することは出来ないと。なぜ、神はこのようなことを赦されるのですか？なぜ、このようなことを為さるのですか？問題は私たちが分からないことです。完全な神、すべてにおいて正しい神は、完全なことを正しいことを為し続けておられるのです。

では、私たちはどうすればいいのでしょう？私たちは「理解し納得しなければ私は信じません。認めません。」と言うかもしれませんが、その高慢さを捨てることです。あなたが分からないのです。神は分かっておられます。神は最善のことを為しておられるのです。願わくは、私たち一人ひとりが「神さま、私には分からないけれども分かっていることがあります。あなたは神です。あなたが為しておられることは常に最善であり、常に正しいです。私はそれを信じます。」と言うことです。

Ｂ．偉大さの裏付け　　３４－３５節

３４節と３５節は、今私たちが見た３３節の裏付けが記されています。**「なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。:35 また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。」**。この二つの節で、パウロは主の偉大さの裏付けをしています。ここで三つの修辞疑問を上げています。つまり、この三つの質問の答えはもう明白です。すべて「ノー」です。このような疑問文を使いながら、パウロは、今私たちが見て来た主の偉大さを裏付けるのです。

１．なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか？

「いったい、だれが神のお考えになっておられることを理解できますか？」、この答えは簡単です。「だれもいません」です。パウロはこの３４節のみことばを旧約聖書のイザヤ書４０章１３節から引用しています。**「だれが主の霊を推し量り、主の顧問として教えたのか。」**、パウロはヘブル語聖書のギリシャ語訳である７０人訳聖書を少し変えてここに引用しています。パウロはなぜこのイザヤ書のみことばを引用したのでしょう？実は、イザヤ書４０章は、イスラエルの民がバビロン捕囚からの解放の約束が記されています。神は、イスラエルの人々にバビロンの補囚から解放されることを約束したのです。そのことが記されているのがイザヤ書４０章です。しかし、その約束を聞いたイスラエル人はどうだったか？彼らはその約束を信じることが出来なかったのです。なぜ信じられなかったのか？彼らは自分たちの力をよく知っていたし、そして、バビロンの力を知っていたからです。どうして自分たちがこの強力なバビロンに勝利することができるのか？と。そこで神は、このイスラエルにどんなに不可能と思えることであっても、神には不可能なことがないということを教えるのです。

ですから、４０章には主の御力が記されているのです。いかに強力な国であっても、神の前には無に等しいということを教えています。４０：１５には**「見よ。国々は、手おけの一しずく、はかりの上のごみのようにみなされる。見よ。主は島々を細かいちりのように取り上げる。」**とあり、つまり、無に等しいと言っているのです。あの強力なバビロンでさえも、神の前には無いに等しいと言うのです。神に敵対するこの世界のすべての者たちが集まり、最新の兵器を持ち寄ったとしても、神は「無いに等しい。」と言われるのです。「手おけの一しずくに過ぎない。はかりの上のごみだ。」と。パウロはこうしてこのことばを引用することによって、イスラエルの救いの確実性を語ったのです。神に逆らい、神に背いたイスラエル、しかし、必ず、彼らがこの救いに与るときがやって来る。人間的には不可能と思えても、神は必ずみこころを成されるということを明らかにするのです。人には不可能と思えることでも、主にとってはそうではないのです。

信仰者の皆さん、正直言って、私たちには神のみこころのすべては分かりません。なぜ、このようなことが起こっているのか、どうして神はこのようなことを良しとされるのか…。確かに、私たちには分

からないことが私たちの周りにはたくさんあります。しかし、先ほども見たように、私たちに必要なことは、私が分かるから納得し受け入れるのではなく、神が為しておられることだから受け入れるのです。それが信仰です。それが主を崇めることです。たとえ、理解できないことでも、主のみこころは必ず成されると、そこにしっかりと私たち自身の確信を置くことです。主のみこころは成されるのです。だから、「心配しなくていい。今、あなたに理解できないことがあったとしても、主は必ずみこころを成されるから心配しなくてもいい。」と言われるのです。

２．だれが主のご計画にあずかったのですか？

二つ目は３４節の後半にあります。**「また、だれが主のご計画にあずかったのですか。」**と。「主のご計画にあずかる」と新改訳聖書は訳していますが、どうもこれはこの箇所で言わんとしている意味を明確にしていません。この箇所のギリシャ語訳は「だれが主の助言者、相談相手になったのですか。」となります。新共同訳はこのように訳しています。「だれが主の相談相手であっただろうか。」と。答えは「だれもいない！」です。なぜなら、「いったい、神にアドバイスを差し上げることが出来るほど、神以上に知恵のある人がいるか？」ということだからです。どこにそのような人がいるでしょう？神がだれかのアドバイスを聞かれて、「あなたのアドバイスを求めてよかった。気付かなったことを教えてくれてありがとう！」などと言われるでしょうか？だれも自らの主への賢明なアドバイスによって、神から感謝されるような者はいないのです。

神は被造物に依存することなくご自分の計画をお立てになります。ご自分の摂理に基づいてすべての計画を考え出されたのです。この**「だれが主のご計画にあずかったのですか。」**ということばは、実は、旧約聖書のヨブ記を引用しています。ヨブ記４１章１１節です。**「だれがわたしにささげたのか、わたしが報いなければならないほどに。天の下にあるものはみな、わたしのものだ。」**。パウロはなぜこの箇所を引用しているのでしょう？ご覧になってもその通りには引用されていません。先ほども言ったようにこれも７０人訳を使っているからです。パウロがヨブ記のこの箇所を引用したのには理由がありました。皆さん、覚えていますか？ヨブは大変な苦しみに遭遇しました。私たちが経験したことのないような悲しみを彼は味わいました。彼は間違いなくすばらしい信仰者でした。ところが、友人たちがやって来て様々な間違ったアドバイスをしました。その中でヨブは悲しいことにこのような思いを持つのです。「神は不公平だ。神はもしかすると不正を為すのではないか？」と、神の知恵を疑ったのです。そのときに、主はヨブを責められました。それが３８－４１章に出て来ます。

神を疑ったヨブに対して神は彼を責めたのです。主はヨブに神がいかに偉大なお方であり、知恵と力に富んだ方であることを示されるのです。そして、その時にヨブがしたことは、４２：６**「それで私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。」**です。これがすばらしい信仰者です。悲しいことに、私たちの中で罪を犯さない人はだれもいません。しかし、信仰者は神の前に喜ばれたいと願っているから、いつも罪を悔い改めます。そして、神の前に正しいことをしようとします。ヨブは神の前に自らの罪を悔い改めたのです。そして、ヨブはこの４２章２－３節でこのようなことを言っています。**「あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げられることを、私は知りました。:3 知識もなくて、摂理をおおい隠した者は、だれでしょう。まことに、私は、自分で悟りえないことを告げました。自分でも知りえない不思議を。」**と。ヨブは自らの罪に気付いているのです。「いったい、私は何者でしょう？神さまにご意見を申し上げるなんて…」と。

最善を知っておられる主がすべてのことを為しておられるのです。だから、神に任せておけるのです。だれも神に助言できるような知恵を持った人はいないのです。この方はあなたの助言など必要としません。なぜなら、この方は何が最善であるかを知っておられるからです。だから「この方に任せておきなさい」と言うのです。私たちの神はそれ程偉大な方だと言うのです。

３．また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか？

そして、三つ目に３５節にこのような質問があります。**「また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。」**、このみことばも非常に難しい訳がなされています。ギリシャ語では「だれがまず最初に主に与えて、それを取り戻すことになるだろうか？」と訳せます。口語訳聖書では「また、だれがまず主に与えて、その報いを受けるであろうか。」と訳されています。どういうことでしょう？例えば、私たちがだれかに何かを貸したら、その人はそれを返してくれます。そのことです。私たちが神に貸して、そして、神がそれを返してくださる、そのようなことがあるか？と言うのです。つまり、パウロが言っていることは「いったい、私たちは神に何を与えると言うのか？」です。私たちは神に何も与えることなどできないのです。神は私たちに何の借りもないのです。つまり、神には私たちに何かを与えなければならないという責務などないのです。

今、あなたが楽しんいるこのいのちは神があなたに与えなければいけなかった、そのようなものでは

ないと言うのです。ここにいるすべての人たちが、このような祝福をいただく資格などないし、神には何かそのような祝福をあなたに与えなければいけないという責務など「ない」ということです。もし、私たちが何かをお貸ししているのなら返してもらうことができます。いただくことができます。しかし、私たちは神に何も差し上げることができないのです。ですから、今、私たちがこうしていただいているこのいのちも、当然受けるべきものではなくて、神が一方的にあわれみをもってあなたに与えているに過ぎないと言うのです。あなたがこうして楽しんでいる救いも、神があなたを救ってあげなければいけないという、そのようなものはあなたの内にはなかったのです。神がこの世界の人々を見て、この人は特別だから救ってあげましょうと、そうではなかったのです。私たちは罪に汚れて、永遠の滅びに向かう存在だったのです。それがふさわしかったのです。

神は私たちに何かあわれみを示す必要など全くないのです。神には何の借りもないのです。その神が一方的にあなたにあわれみを示されたのです。Ⅰ歴代誌２９：１４に**「まことに、私は何者なのでしょう。私の民は何者なのでしょう。このようにみずから進んでささげる力を保っていたとしても。すべてはあなたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません。」**とあります。この著者は知っているのです。すべては神から与えられたものだということを。

信仰者の皆さん、パウロは分かっていたのです。「私が持っているすべてのものは神のあわれみによって与えられたものだ。」と。あなたの健康もそうです。あなたのいのちも、あなたの持ち物もそうです。あなたの永遠のいのちもあなたの救いもそうです。そのすべては神が一方的にあなたに与えてくれたものです。神にはそれをしなければいけない義務はありません。そのような責任もありません。ただ主は一方的にしてくださったのです。

だから、パウロは言うのです。「何と私の神はすばらしいお方なのか！こんなにすばらしい祝福を与えてくださり、罪の赦しをくださった。それだけでなく、こうしてこの地上において神とともに生きる人生を楽しむことができる。」と。このイエス・キリストの救いを受けていなければ、そのような人生を歩むことはできないのでしょう？全く一人ぼっちで、永遠の滅びに向かって日々を過ごさなければいけないのです。しかし、私たちはこの救いをいただき、この救いを与えてくださった偉大な真の神とともに歩むことができるのです。この方はいつも私に耳を傾けてくださり、私の必要をご存じであるから必要を与え続けてくださり、守ってくださり、そして、永遠の家にまで私を安全に導いてくださる。このような祝福は私たちが何か特別だからではないのです。神が一方的に、そのようにこの祝福を与えてくれたからです。そのことをパウロは知っていたのです。だから、この神を称えようとしたのです。何か私がしたことに神が報いてくれるのなら、自分を誇ることが出来ます。「私はこれだけのことをした…。」と。でも、パウロは知っていたのです。すべては神のわざだと。だから、この方だけが誉められなければいけない、私たちの主は偉大なお方であると言うのです。

Ｃ．主の偉大な理由　　３６ａ節

三つ目に、パウロは３６節の初めに「主の偉大さの理由」を説明しています。**「というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。」**と。何のことでしょう？

<u>すべてのことが…</u>、

１．**神から発し**＝いったい、すべてのものはどこから来たのか？すべては神から来た、神がお造りになったと言います。

２．**神によって成り**＝新共同訳では「神によって保たれ」ということばが使われています。すべてが神によって造られた、そのすべてのものが保たれているのはどうしてか？と言うのです。それは神が支えているからだと言います。

３．**神に至る**＝口語訳聖書では「帰する」ということばを使っています。神によって造られたもの、神が保っておられるもの、その後はどうなるのか？すべてのものは神のすばらしさを証するのです。

この部分の新共同訳は「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。」となっています。ジョン・マレーという神学者はこの箇所をこのように説明しています。「すべてのものは神から出て来たので、神はすべてのものの源である。神は創造主である。神はすべてのものを存在させ、すべてのものをしかるべき目標に向けておられる行為者である。そして、神はすべてのものが神に栄光を帰するために戻って来る最終目標である。」と。神の御手によって造られたすべてのものは神の栄光を現わすものとして造られました。そして、その目的のために保たれているのです。パウロはそのことを私たちに教えてくれました。神の被造物は神の偉大さを現わしています。そのように考えたときに、皆さん、あなたもそのために生かされているということを思い出さなければいけません。

救われてあなたが生かされ、こうして今日が与えられているのはあなたの神のすばらしさを証するた

めです。そのために神は被造物を造ったのです。そのために被造物を保っておられるのです。そして、すべての神によって造られたものの最終目標は、創造主なる神の栄光を現わすことです。この神のすばらしさが世に証されることです。そのためにあなたも私も生きているのです。ですから、最後に、３６節の後半にこのようなことばが続くのです。

Ｄ．頌栄　　３６ｂ節

「どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。」と、最後はこの神への礼拝で終わるのです。パウロは敢えてこの**「栄光」**という名詞の前に定冠詞を付けました。**「この神に、」**と。なぜでしょう？パウロはこの神に最高の栄光、至高の栄光が与えられることを願っているからです。なぜなら、この方はそれをお受けになるにふさわしい唯一のお方だからです。ただの栄光ではないのです。最高の栄光がこの方にふさわしいと言うのです。詩篇１４５：３に**「主は大いなる方。大いに賛美されるべき方。その偉大さを測り知ることができません。」**とあります。この偉大な神を心から誉め称えるのです。心から賛美する、心から礼拝するのです。信仰者の皆さん、そのために神は私たちを生かしてくださっているのです。

私たちはローマ書の１章から１１章までを学んで来ました。ここには様々な神学が記されていました。私たちがこの神について信じていること、それが記されています。どのような神なのか？どのようなことを為さったのか？どのような神を私は信じたのか？それをしっかりと見て行くときに、結果として生まれて来るのがこの「礼拝」です。神という方を知れば知るほど、神の偉大さを知れば知るほど、神がこんな祝福を自分に与えてくれたことを知れば知るほど、私たちは黙っていても、心の内側からこの神に対する賛美が出て来ます。それが主が喜ばれる礼拝なのです。

どんなに好きな讃美歌を歌っても、私たちの心がこの神の真理によって燃やされていなければ、それは真の賛美ではありません。私たちの心がこの神のすばらしさによって溶かされて、そこから溢れ出て来るもの、留めどもなく溢れ出てくる神に対する感謝、神に対する称賛、それが神が喜んでお受けになる礼拝の心なのです。ジョン・ストットという神学者はこう言っています。「知らない神を礼拝することはできない。すべての真の礼拝は、キリストと聖書に神がご自身を明らかにされたことへの応答である。そして、神がどのようなお方であり、どのようなことを為されたのかに対する私たちの応答から生じるもの、起こるもの、それが真の礼拝だ。」と。だから、私たちは神を知ろうとするのです。神を知れば知るほど、その神にふさわしい礼拝が私たちの内側から出て来ます。

パウロはこうして、私たちが信じる神、私たちをこのようにあわれんで救いへと招いてくださったこの神がどれ程偉大なのかを教えてくれました。それを見たときに、パウロの心から湧き上がって来たものは、「神さま、あなたは偉大です!あなたのような神はほかにはいません!あなただけが神であり、私はあなただけを誉め称えます!」という賛美です。あなたはそのような心をもって歩んでいますか？そのような感謝をもってあなたは礼拝者として歩んでおられますか？何となく日々を過ごしていませんか？

詩篇１０３：２で著者はこのように言っています。**「わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」**、信仰者の皆さん、思い出さないといけません。主があなたのためにどのようなことをしてくださったのか、どのような祝福をあなたに与えてくださったのか、私たちの理解を超えたどれ程の愛でもってあなたが愛されているのか、私たちの理解を超えたどれ程大きな犠牲によってあなたが受け入れられているのか、主の良くしてくださったこれらの**「何一つ忘れるな。」**ということです。なぜなら、それを覚えているときに、あなたは神が喜んでくださる礼拝者として歩み続けていくことができるからです。

私たちの神は称賛に価するお方だとパウロは言いました。このような偉大な神だからです。あなたもそのように心から告白して「主よ。その通りです、アーメン！！」と言いますか？主の良くしてくださったことをしっかりと覚えることです。どんなに偉大な神かを覚えることです。そのようにして、与えられた今日を生きてください。感謝をもって、喜びをもって！！

《考えましょう》

１．あなたの神はどのようなお方ですか？自分のことばで記してください。
２．主への信頼を強めるためにはどうすればよいのでしょう？
３．あなたの生かされている目的、救われた目的は何かを記してください。
　　また、それは具体的にどのように生きることなのかを教えてください。
４．理解できないこと、その理由が分からないことが私たちの周りで起こります。その時、どのように対処することが主に喜ばれると思いますか？　どうしてそれが主に喜ばれることなのか、その理由を記してください。